

1. 今月の活動; ストップ結核イニシアティブ、太平洋ヘルスサミット、日野大会**【 ストップ結核イニシアティブ 】**

6月10日、公明党の外交力強化特命チーム(座長=山口那津男政務調査会長)と外交部会(浜田昌良会長)が、外務省とJICAから約20名の参加を得て参議院会館にて会合が開かれた。外務省提出の資料に「人間の安全保障とODAの充実」の5項目の一つとして「ストップ結核(TB)イニシアティブ」が取り上げられ、党の「総合的外交力の強化に向けて」と題する提言の中へは「結核や母子保健、水処理など我が国の強みを発揮できる分野に重点を置いて、人々に直接に影響を及ぼす深刻な脅威の除去に積極に取り組む。このため、保健システム強化や、『世界エイズ・結核・マラリア対策基金』等を通じた積極的貢献や新型インフルエンザ対策への協力を行うとともに、国連ミレニアム開発目標(MDGs)達成等に向け国際機関への十分な拠出水準を確保する。」との文言が盛り込まれた。また翌日、河村建夫内閣官房長官、中曽根弘文外務大臣へ本提言の申し入れを行った。

【 太平洋ヘルスサミット 】

6月16日~18日、アメリカ・シアトルにて開催され、結核予防研究所の石川所長、日本リザルツの白須が出席した。同じく日本から出席されたお二人のコメントを以下紹介する。「国際的に重要な席上で日本のプレゼンスが高くないということは残念でなりません。そうしたなかにあって非営利団体の方々の力は非常に大きいということに改めて感じております。さらに日本リザルツのようなNGOや患者の方々あるいは医療現場の方々の声を大にしなければならぬと痛感致しました。この貴重な人脈と情報、体験を活かしてこれからの医療に微力ながら貢献出来ればと思います。」(臨床検査薬企業幹部)「シアトルでは、本当にお世話になり有り難うございました。しかし、日本リザルツの行動力、そしてコミュニケーション力には感服致しました。また、7月6日~9日スイス・ジュネーブで開催の国連経済社会理事会(Economic and Social Council)への出席とは、お忙しいですね。さすが、日本リザルツのアクティビティーの高さそのものですね。それでは、また日本でお会いできるのを楽しみにしております。」(製薬メーカー企業幹部)



MDR患者さん(左)と白須事務局長(右)



白須(左)とWHOチャン事務局長(中央)、ユニセフ・アン事務局長(右)

【 日本リザルツ日野大会 】

6月21日、日野市多摩平の森ふれあい館にて、日本リザルツ日野大会を開催した。最近の活動テーマであるマイクロクレジットと結核についての世界的な状況とその対策について報告した後、参加者に世界の貧困の状況をより理解してもらうため、途上国の子どもと日本の市民が対話するという設定で2人1組となりロールプレイングを行った。今後も日野市を含め西東京地域で活動していただける方を募集している。日野市や国立市の市議員の方々4名も参加された。

【 第84回 日本結核病学会総会 】

7月2日、3日、札幌コンベンションセンターにて開催された。ストップ結核パートナーシップ日本(STBJ)と結核予防会(JATA)との協力で展示ブースを設置し、普及啓発活動を行った。参加者は700~800名で大変盛況であった。また、太平洋ヘルスサミットでもお会いした、ビル&メリнда・ゲイツ財団のピーター・スモール氏に会場で再会し、シアトルでのストップTBチョコレートを大変喜んでおり、また、リザルツの活動は非常に重要であるという激励のお言葉もいただいた。

2. ストップ結核パートナーシップ日本の活動

【 耐性結核新薬開発基金の設立等 】

6月22日、ストップ結核パートナーシップ日本(STBJ)は厚生労働記者会にて、結核の新薬、新検査薬などの開発や実用化に向けた環境づくりを目指した耐性結核新薬開発基金(M/XDR-TB Frontier Fund)の設立し、日本の民間企業が開発中の新抗結核薬や新結核診断検査薬の途上国における開発治験を支援する。多剤耐性結核は世界中で、年間50万人の新規症例が発生しており、そのうち約10%が超多剤耐性結核である。

また、STBJでは2つの助成事業を開始している。国際交流基金日米センターの助成事業、地球規模課題に対するACSMキャンペーンの学術的研究は、STBJ 含め世界的に展開しているストップ結核パートナーシップのACSM (Advocacy, Communication, Social Mobilization)を研究し今後、学術/実務の両方へフィードバックを目指すもので、すでに複数の専門家による研究が始まっている。また国際コミュニケーション基金の助成事業では、結核問題の関心喚起のための、結核患者の国際的な活動と交流促進に関する活動を展開する予定で、具体的にはフィリピンと日本の患者交流を企画している。

【 ストップ結核パートナーシップ(ジュネーブ)ニュース 】

前号でお伝えした5月16日、17日横浜赤レンガ倉庫にて開催されたアフリカンフェスタ2009での結核啓発活動の様子が、ストップ結核パートナーシップ(ジュネーブ)の最新ニュースに掲載された。

3. マイクロクレジット(MC)

マイクロクレジット近況報告(7)

【 広中和歌子参議院議員との意見交換会 】

リザルツとの出会いは、去年の母子手帳国際会議で白須さんにお会いしたことがきっかけでした。白須さんより結核・マイクロクレジット・女性の問題・路上生活者への支援などのお話をさせて頂いて、私の心は動かされました。これらの問題はわたしが看護師として仕事を始めて以来、実際に患者さんからの声を聞き疑問を抱いた問題がほとんどだったからです。そして始めの一歩としてマンスリーミーティング、その前進としてアドボカシーへ参加させて頂く様になりました。アドボカシーとは何だろう?と辞書を引いてみたりもしましたが、実際に行動してみて自分が考えていることを形にしたい時に、みんなで協力して実現していこうとすることなのだと思いました。

今回広中和歌子先生へのアドボカシーはマイクロクレジットについてです。直接海外に出向かれ、ご自分で現地の状況を見て改善のための方法を考えたり、NGOやNPOの力を最大限に引き出せるようODAへの疑問を明らかにする中で、直接国を動かして活躍されているお話を伺うことができました。また、関連したお話の中で広中先生はノーベル平和賞を受賞される以前からユヌスさんをご存じだったことも初めて知りました。その中で友人としてのユヌスさんの素顔をお話いただき、私にとっては今まさに国際協力について学んでいる中で、雲の上の存在であるため、とてもワクワクして、広中先生との会合の時間があっという間に過ぎたように思われます。そして、とても貴重な経験になりました。私は、これからJICA青年海外協力隊、看護師隊員として中米に在ります『ホンジュラス』へ2年間赴任予定です。私の看護学生の頃からの夢でありました途上国での保健活動ですので、不安よりも期待と希望に満ちております。実際フィールドに立ってみて、どれだけ日本の考え方や自分の考え方が貧困の立場の人々に寄り添えるか、体験したことをまたご報告できればと思います。 看護師:石田真里

リザルツは、政治家やメディアと協力し、貧困に苦しむ人々の声を政策に反映させ、「貧困と飢餓のない世界」を創ろうと活動している国際市民グループ(NGO)です。日本の他、米国、カナダ、英国、フランス、豪州、ドイツ、メキシコなどで活動しています。日本リザルツは1989年の発足以来、ODA(政府開発援助)政策において、貧困削減への費用対効果が高く、且つ、顔の見える援助政策について、政府に提言しています。リザルツのユニークな活動方法は、草の根の市民から、国務長官のヒラリー・クリントン氏、経済学者ジェフリー・サックス氏、元南アフリカ大統領ネルソン・マンデラ氏など世界の著名人達に至るまで、幅広い層の支持を得ています。マイクロクレジットでノーベル平和賞を受賞したグラミン銀行のムハマト・ユヌス氏は、日本リザルツの名誉顧問です。

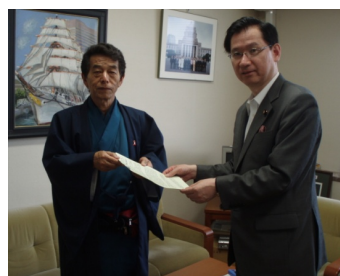
4. パートナー ボランティアの皆さまからの声

「日本の民主主義の曙光 リザルツ参加の意義

もう、二十年近く前になるが、晩秋のすがすがしいある日、都下の知人宅での持ち寄りパーティーに、私は子供たちと参加していた。主催者とは、二十年以上の付き合いでもあり、参加者のほとんどは古い付き合いの友人たちだった。その中の見慣れない男性を指さしながら、企画者の一人が、「あの人、変なのよお、こんなところで勧誘なんかして…」と私に愚痴った。そのころから、私は色んな相談事を受けるようになっていたが、「ま、年取ったせいだろう」と思い、その時も、彼がわたしの方に来たら、ひとこと言ってやろう、と思っていた。やがて、彼はわたしのところへやってきて、チラシを出しながら、「云々…」と説明しだした。わたしの全く関心のない分野の話だったが、そのチラシの最後のページを、ちらっと見ると、そこには、その団体の会計報告が詳細にあり、年会費三千元、と記載されていた。わたしは基本的に、会計報告をきちんとしない団体には一切参加しないことにしていたのだが、わたしは彼の動きを封じるためにも、「三千元かぁ…参加するよ。はい、参加費、そのかわり、この場所はこういうことのための集りじゃないのだから、きょうは、もうこれだけにしなよ。」と言った。これが、私とリザルツの縁の始まりであり、私としては遅ればせながら“民主主義”に目覚める発端となった。世界史上、古代エジプトを例外とすると、ローマ国が最も長い政体維持を記録している。しかも、各種民族や王権が入り乱れて群雄割拠する中で、ローマ国は、王政、共和制、帝政などと政治体制を変化させつつ、1000年あまりに亘り、その支配権を維持したのは驚異的といってもいいだろう。その特色は、色々あるが、周辺国のすべてが王政の時代に、なんと驚くことに共和制であったり、帝政時代でも必ずしも世襲制にこだわることなく、極端な場合、その時の蛮族でさえもが皇帝になっている例もある。このへんの柔軟性というか、なんと表現に困るような国体の維持に関する対応能力(元老院という国体からみれば極く一部の特権階級が支配・判断をしていたとは言えども)に関して大いに参考にすべきであろう。さて、わが日本史上では、国体をどうするか、などという国民としての議論は幕末・明治維新の時に、ほんの一時期議論しただけで、しかも、その参加者たちの大半は世界情勢、特にアジア諸国とヨーロッパ諸国の関係、などはほとんど現地を見ていないし、理解もしていなかった。その後、大東亜戦争後は、外部からの強大な支配者の存在に啞然とし、また、国民の大半は日々の食うことで頭がいっぱいであり、国政云々などは関心外であった。このような、彼我の差を考えると、日本の民主主義などは、まだ、ほんの昨日ぐらいから始まったようなモノで、出来具合の良し悪しを議論するには早すぎるのではないかと私は考えている。このような時勢に、弱小な団体であるわがリザルツが、欧米のリザルツとの協調の下とはいえ、国会議員や国際機関などに色々を意見を出してみると、意外に、それなりの反応が返ってくるということは、なかなか捨てたものではない、と我ながら感心している。現在の日本では、国会議員などに面談し意見を具申する場合の大半は、自分の立場に直接関連した状況改善、つまり日本語で言うなら陳情だが、を目的としているのだが、リザルツのように他者、とくに外国の恵まれない人々に代わり、意見をするというのは、全く例外的な行為である。日本の民主主義が、今後もローマのように1000年以上も続くことを期待すれば、その端著に既に、このような団体が存在したということは、全く奇跡に近い珍事ではないか？ ボランティア:宮川俊彦



マンスリーレターを手渡す宮川氏



宮川氏(左)と浜田昌良参議院議員(右)

5. お知らせ

- [ストップ結核パートナーシップ日本(STBJ)常任理事会]
7月16日(木) 午後4時30分～ 午後5時30分 結核予防会水道橋ビル
- [第2回 国際連帯税を推進する市民の会(アシスト)運営委員会]
7月24日(金) 午後6時30分～ 午後8時30分 千代田パークサイドプラザ
- [国際連帯税推進協議会(第4回)] 7月30日(木) 午前9時30分～ 11時30分 参議院議員会館1F 第4会議室



お問い合わせは、結核予防会まで
TEL:03-3292-9211

ACジャパン(旧公共広告機構)は、7月1日からテレビ・ラジオ、新聞・雑誌、街頭などで始める結核対策の広告キャンペーンにタレントのビートたけしさん(62)を起用する。

厚生労働省によると国内の昨年の新規結核患者数は、2万4,760人。10万人あたり19.4人と米国やカナダの4倍に上る結核大国だ。昨年11月から「ストップ結核大使」も務めるたけしさんは、ポスターで「結核は現代の病気だ」と強調=写真、結核予防会提供=。テレビでは早期の検査受診を呼びかける。

たけしさんは、来年6月末まで、結核予防の重要性を訴える。